

一年生の絵画指導「ひっぱりっこ」

小野寺 浩 子

類型的なのが気になる

「ひっぱりっこ」を描いたのは一年生の十月だった。天気の良い日が二、三日続き、子ども達は力をもてあましていた。そこで教室にマットを持ち込み、腕ずもうをしたことから、ひっぱりっこに発展し、ついに男女がまわす力持ちのチャンピオンを決めることになってしまった。驚いたことに女子二人の決戦になり、それぞれの友達が別れて応援合戦も、ものすごく教室は喚声で一ぱいになった。頭からつま先まで全身に力をこめてひっぱりついていた。その時の強い興奮と印象がいつまでも消えず描いてみようということになった。ちょうど校内図工展が近かったし、その内容が「生活を描く」だったので、すんなりと取り組めた。

一応でき上がって展示してみると類型的なのが気になった。よく見ると子どもの表情がどれも同じでないことが救いであった。それは、この子どもをよく知っている担任のひとりよがりであり、手前味噌的な見方であるかもしれない。

描くことをはっきりさせる

子どもが一年生に入学してから一つの作品としてまとめたのはこれが二作目であり、絵の具の使い方が十分でない状態であった。色彩指導は後まわしになっていた。描く前にひっぱりっこをしている友達のどこに力を入れているかについて話し合った。体がどうなるか、手はどうか、足は曲がるか、普通の状態と違う点について気付かせた。顔はどうだったか目に見えた種々の事について「ひっぱりっこ」を再現しながら思い出させた。もちろん自分の経験をもとにして話し合っているのだが、ひっぱりついている本人（自分）は、どんな気持ちだったのか、どんなふうになんばったのか、描くにあたっては一番大事なことなので、ひとりひとり言わせ、それを紙に書かせ、それが絵を描く目あてであることを強く意識させた。作品1の子は、「ぼくは体が曲がりそうになって、何も見えなくなったけど手を放さないでひっぱりついた。」と書いた。幼稚な人物を描いたけれど、しっかり足をふんばり、全身で抵抗している。必死でひっぱりついているにもかかわらず相手に引きずられそうになって、汗がたらたら床にも落ちたという。他の子ども達にも全員描こうとすること



さとう あきら



あいた けいこ



さいとう けんたろう



たむら ちえ



はしづめ ゆうこ

を文で書かせ、目あてをはっきりさせた。

描くことが決まるまでに描きたい意欲をどんどんふくらませていかなければ、描き終わるまで新鮮な気持ちを持続できない。いやいや描くことはさせたくないと思っただが、入学して以来の大作（八時間位）に取り組ませるのであるから不安だった。描くことをよりはっきりさせるために、友達の描きたい場面や気持ちを聞く時間をとった。「ぼく、手がなくなったと思った。」とか、「わたし、なんにも聞こえなかった。」とか「清恵ちゃん顔こわかった。」とか、自由に話し合っているうちに、描きたいことがぼんやりしていた子どもも更に焦点が明確になってきたようであった。

描きたいことをどのように

いよいよ描き始める時一番先に描くのは、がんばっている自分を大きくということだ。鉛筆で下描きをするのもこれが初めてである。

今まではクレパスかうすいコンテで線描を主にやってきた。鉛筆で描かせたのは、納得するまで何度消してもいいということさせて見た。自分の強烈な印象を描くのだから形は一気にできたが、手に力が入っていないとか、立ちんぼのままひっぱっているから力が入っているように見えないとか、体が斜めになってるんだよとか、わいわい言っているうちに、消したり描いたり穴があいたりした。穴があいた子には裏から紙を貼ってやり、「先生ぼくの手を持ってねじって動かして」という子には支えてやり、大さわざで下書きをした。一年生に下書きなどと疑問を持たれる点もあるけれど、めあてがはっきりしているからあきもせず続けた。描き出してからは口を出さないことにした。言いたいことはずいぶんあったが、気の小さ

い子はおどおどするし、自信のある子にはにらまれるからだ。特に手足の表現には不満があったけれど、子どもが夢中になって描いているだけでも目的の一部が達成されたと思ってがまんして見ていた。自分を描いたら相手を描くことにした。子どもによっては両方の力関係で二人を一しょに描いた者もいる。相手のことは忘れていくというより、ひっぱった感じは残っていても、どんな様子だったか分からない子どもが多かった。そこで子どもに何回かひっぱりっこをくりかえしてもらって、よく見て描くことにした。ここで、ふんばるためには足がとても大事な役をしている。あまり小さく描いたらふんばれないことを話し合った。体はどうなるほど力が入っているのが分かるか、顔はどの方向をむいているかも、よく見させた。二人が描けたら、ひっぱりっこをどこでやったかがわかるように描こうと、一応の順序を決めておいた。

描きたいことをもりあげる

早い子どもは一時間ぐらいで下書きが終わり、早く色を付けたいと思っている。ほとんどの子どもは二時間ぐらいかかっている。今までは、色で直接描いてきたので、鉛筆で描いたのに色を置いていたらぬり絵的にならないかと懸念された。隣の子の洋服をよくみたり、自分の顔にさわったりしてふくらみや、厚さなど量感を感覚的に把握させてから色を置かせた。ぬり絵にならないことを願って色付けが始まってみると心配したほどではなかった。鉛筆の線があまりにも弱々しく、子ども達が経験している力という感じには及ばなかった。色で描くということとあまり変わらなかった。それでも、自分の気持ちを鉛筆で表現してしまっている、色で描く

時は二回目を描くような感じになり迫力がなくなってしまった。早く終わった子どもが、応援をしている人を書いていかと云うので、中心がぼけるかと思っただけ、雰囲気盛り上げるのにはいいだろうと思って、中心の二人がぼけないように入れていいと言った。椅子の上が上がって応援している子、床につぶして床をたたきながら応援している子（思うように表現できなかったようだが）と人が増えたので焦点がなくなってしまったのもあった。画面構成については適切な指導はできなかった。今までのうちに色彩指導をしていないので美的ではない。応援団を描いたことによって中心人物がくわれてしまい描きたいことがうすれてきたので半強制的に床カマツトをつけさせた。中心になる自分と相手ははっきり見えるような色にしようと言っておいた。

色彩ももうちょっとだし、画面構成もでたらめであるし、部分的に見ていくと、手に力が入っていないし、足のむきはみな同じように、どうも、と首をかしげたくなる点はあるけれど、自分（どうしても自分を描けない子には、決勝に残った子を見て描かせた）と相手を大きく描いたということで一応目的は果たしたと思っている。

残された課題は

この絵を描く前に、切り抜き版画でひっぱりっこをさせると、手足の関節や、体や顔、頭の関係が貼りがえることによって、よりよく分かれると教えていただいたが、間に合わなかったし、人物を切り抜くことそのものが大変な仕事だった。そこで担任が手足の動く紙人形を作っておき、手足を動かして、関節を曲げのびし自由に遊ばせた。描いている途中で教師が少々口をはさみ、主題とくいちがって

しまった子どももあったようだ。主題はみな同じであったが、発想や表現は、それぞれの子どもの自由であり、個性が出てくるようにと考えたつもりであったが、出来上がったものは、パターン化しているのが反省させられた。それでも子どもは、他の作品より自分のがとても上手に描けたという。つまり比較する力は十分ではないにしても、自分自身は、思う存分がんばって描いたということになるのだろう。不出来の分は指導者のきめ細かい配慮のなさにあると思われるし、もっと手を意識させればよかった……。二人の足の組み方がみんな同じようだ……。色をもっと指導しなければ……。中心がぼやけた等々今後残された課題は大きく、限りがない。

作品について

作品1は前述したので省く。

作品2は表情に漫画的なところはあられるけれど、強力な相手を負かそうと腕に力を入れている。右側の女の子の腕がびんと伸びて色ぬり方も丁寧である。右側の子が優勝者であった。

作品3は頭の中でこうであろうと思って描いた部分が多い。両足を大きく開いてポーズとしてはよいが、何かものたりない。足のふくらみが力強さを感じさせる。

作品4 かぜで休んでいただったのでみんなより四時間も遅れて始めたけれど、同じくらいに終わった。つまり一気に描きこんだ。いつもは仲良しの友達と敵味方になってひっぱりっこをしたので、こんな表情になったのだろう。足の方が切れて描けなくなったので紙の上部を切って下に貼ってやり、やっと足を入れて安心したようだった。下は粗雑だけれど、顔から肩の所に力いっぱいという様子が見える。

作品5 この作品はあまりにもたくさんの色を使いすぎてま
りがなくなつたけれど、すごく楽しそうに描いていた。色を付ける
時も、「うんしょ、うんしょ。」とひっぱりながら描いていた。右
側の女の子の足つきが不自然だけれど、それががんばっているよう
に見えるし、二人の顔のむきも、ひっぱりっこを強調していると思
われる。応援の子どもががんばったのでおそろかにできなかったようだ。

一年生はとても柔軟な考え方をし、発想をするものと、勝手に思
って何日かを過したが、学習とか、絵を描かせようとか思う時十分
引き出せずどうしてかと悩んだ。休み時間友達同志で話す時は、び
っくりするほど鋭いことを言い合っているし、遊びの時も工夫して
いるなあと思える点も見えるし、子どもでなければ見つけられない
ものに気付いてもいる。しかしそれは思いつきであり、出まかせで
あることも多かった。ものを観たり、何かをした時に、本当に大切
なものを見つけ、真実な事に感動しているかという疑問な点があ
る。強烈な出来事とか衝撃的な場面では荒々しい感動は受けるだろ
うし、そういう機会は多い。心をゆり動かすような感激とか思いつ
くのは、ある程度こちらからしむけていかなければならないと思
った。どんな作品もどんな行動も、その心の動きから生まれてきた
ものでなければ本物にならないだろうし、自分自身も高まってい
かないと思う。

作品5を描いた有子さんは、入学当初から毎日、目がきらきらと
輝いていた。性格が素直で、虫の動きにも花が咲いたことにも、夕
焼け空を背景にした木を見ても、友達との会話にも何かしら新しい
ものを見つけては心の中にたたみこんでいる子どもだ。胸がいっぱ
いになると、「先生、描いていい?」「先生、描いているうちに

またちがうことが描きたくなった。」と、ふつふつと湧いてくる感
情や感動を絵や文にしていた。日記帳も五、六冊は消化した。両親
も現在の成績などは二の次にして、子どもの大らかな成長を中心
に育てていらっしやる。表現は幼稚でも感動は深く大きい。

有子さんのような子どもが、二、三人いたので、何とかして全員
に感動の嬉しさを味わせたいものと思ひ、初めは形から入ってい
た。用具を用意すること(大、中、小、更、画、色画、模造の紙。
描くものとして誰でも使えるようにマジック、ボールペン、クレ
パス)、しかもすぐ取り出せるような所に置いてやった。中には文に
したい子もいたので方眼用紙、文と絵の両方表現できるよう絵日記
のような用紙も置いた。書いたり、描いたりするのは、休み時間、
ちょっと余った時間であった。時々それを貼ってやり、説明させて、
友達同志の刺戟が一つ考えられた。あとは担任が意識的に何にでも
びっくりし、感心し、根ほり葉ほり子どもから聞いてやるとい
うことだ。花をいただいたら、花びらの色や葉の緑に感動し、風がふ
いたら花子さんのスカートふくらんだねと言ってやる。行事が終わ
たら必ず反省や感想をみんなに言わせるといふふうに、こまめに、
どの時間も細かい見方に気付かせていった。小さい変化を見つけた
人にみんなで拍手をしたり、日記のすみにかわいいシールを貼っ
てやって、励ましてあげたりした。

五月ごろからはどの子も日記を書くようになったし、何かの形で
心に浮んだ事やあったことをとどめて置くようにしむけてきた。

六月に入ってから調和とか色とか形についてとり上げるようにし
た。絵画の方としては、人物を意識的に描かせた。正面、横、歩く
走るといふ全体的なところから部分の方もちよくちよく入れた。長

ぐつをはいている男の子の足、本を持っている女の子の手、給食を入れて隣の友達の口、腰かけている時のひざこざうというように、一年生は無理かなと思っただけで、話をつくりながらさせたので、少しも部分と思っていなかった。それに一つ終わると勝手に付け足しをして満足していた。

七月には花の絵を描きながら、混色を知らせ、クレパスとの併用で特徴を伝えさせた。花も一時間に一つ、次の時間に二つというようにして大きな画面があきずに埋まっていった。

八月は日記を義務づけて、感激や感動が薄れないうちに書きとどめ、描いておくことにならせた。

なお、絵画だけでは幅の広い表現、立体的な表現にならないので、粘土、折り紙、空き箱利用の工作もおろそかにせず、ひまをみつけては手がけてきたつもりである。絵画に片寄らない図画工作科にしようという心がけてきた。予想通りいきはしなかったが……。

教師と子どもたちの大格闘

あれは、たしか十五年ぐらい前だったと思う。

「こんど、うちの学校に岩手からすごい先生が来たんだよ。」というサークルの佐々木さんの話。私は民教研の仲間です。岩手絵の会に集まる岩手の人たちを何人も知っていた。彼らには静かに燃える情熱があり、決して便利ではない県内各地に散らばってはいるが実にまとまった活動をしている。それぞれの地域での生活を大事にした実践、地域にあるものを掘りおこし教材化した多様な実践などにかねがね敬服していた。だから、岩手から来た先

私が一年生でやってきた事は美術教育と直接的な関係が薄いとは思いますが、それ以前の物を見て感じる心を育てたいと思って、他の教科で子どもの心をついたり話しかけたりした。一つの目的が達成するまでは二週目に入っても同じ新鮮さで続けることができるよう配慮し、まめ絵画（部分スケッチ）、日記、理科の観察には注意してきた。表現の技術面では、発達に合わせて、一回一目的をくり返すというつもりで進めてきた。子どもの新しい小さい発見は見逃さないように気をつけて、同じ目的を、違う形で何度もした。線、形、面、立体とまめ絵画をしながらそれぞれ意識して描かせた。

何はともあれ、子どもの心がふくらむような生活の場を考えてやることと、何に出くわしても素直に感じられるような柔軟な感情を持てるよう、小さな驚きを持てるよう、どの子も鋭い心の目が持てるようにいろいろな面で配慮してきた。（東六番丁小）

村山盛一

生と聞いて、その人と実践に出合うことを強く待ちのぞんでいたのである。

間もなく現れたその小野寺浩子さんは、「なめとこ山の熊」「よだかの星」そして「大造じいさんとガン」などの物語の絵の実践をつぎつぎと発表し、私たちよりはるかに先輩のその人がその実践に燃やすエネルギーの強さに圧倒された。それが今もってかわらないのである。

小野寺さんの実践の特徴は、題材に強くはれ込むところからはじまる。そのころは物語の絵が多かったが、そ

の物語にすっかりひたり切ってしまい、その世界へ子どもたちを強く誘い込むのである。子どもたちはきっとその迫力におされてしまうのであろう。表わせたいと思う方向へぐんぐんとつれ込まれていくのがわかる。子どもたちに造形的な面で弱いところがみつかる。「うちの子どもたち、ここんところがとってもだめなの。」とくやしがる。しかしそれへのアプローチは理づめである。そして、「だから、こういうことをやってみたの。」と実に様々な方法を取り上げて力をつけさせることに貪欲である。朝焼けの空の色を描くために子どもたちが明けがたにどの子も早起きをして観察してきたりなど、子どもたちもよく頑張るなあと思うところもときどきあるくらいであるが、反面、さっぱりして思いっきりがよく、力

を入れさせるべきポイント以外は全く子どもの自由にさせている。とにかく教師と子どもたちが、まさに大格闘して協同の力で物にしている仕事で、小野寺さんの情熱が作品の中にいつもムンムンと感じられるのである。この「ひっぱりっこ」は生活の絵であるが、そういう点では同じである。

高学年になってもまだ真っすぐ立った身体の人物しか描けないでいる子を見かけるが、造形能力の発達を促すために、この低学年の段階で体や手、足など斜めに曲げた姿の人物を描かせておかなければいけないのであるが、この「このひっぱりっこ」の実践はこういうこともきちんと仕組まれている仕事である。

(高砂中)

* 口絵・「ねぎ」の絵について

二つの作品は、カメラード2号に掲載予定でしたが、編集者のミスで、今回のカメラード3号にページをとりました。さとうひでかずくん・さとうきょうみさん、それに斎藤俊子先生には、たのしみにしていただいたのに申し訳ないことをしました。おわびいたします。